

歴史認識と多様性： ブダペシュトのドイツ占領による 犠牲者の記念碑を手がかりに

辻河 典子



目次

1. はじめに：自由広場のドイツ占領犠牲者の記念碑
2. 記念碑への批判
3. ヨーロッパ現代史をめぐるEU加盟国間での歴史認識の相違
4. おわりに：記念碑に表れる歴史認識——多様性への展望

1. はじめに：自由広場のドイツ占領犠牲者の記念碑

ハンガリーの首都ブダペシュト。この街を縦断するように流れるドナウ川に国会議事堂が面している。国会議事堂があるコシュート・ラヨシュ広場は、2012年から2014年にかけて広場内の外観を1944年以前に戻すべく大規模な改修工事がなされた（ただし記念碑が現在の形に揃ったのは2016年である）。この広場から南東に数分歩くと、自由広場に到着する。ドナルド・レーガン(Donald T. Regan)元アメリカ合衆国大統領の等身大の銅像を通り過ぎると、巨大なソヴィエト軍兵士の記念碑がそびえ立ち、その先には自由広場に面して嚴重な警備が敷かれた合衆国大使館が見える。

ソヴィエト軍兵士の記念碑を仰ぎ見ながら右に曲がり、子供たちが広場内の公園で遊ぶのを眺めながら自由広場を南下すると、車一台が通ることができる程度の広さの東西

に横切る道路に出る。この道路を挟んで、写真1¹にあるように、道の両側に若干ものものしい光景が広がっている。道路の北側(写真1では奥側)、この道路と地下駐車場に通じる二本の道に挟まれた三角形の空間には、第二次世界大戦末期の1944年にハンガリーがナチ・ドイツに占領された際の犠牲者のための記念碑(A



写真 1

német megszállás áldozatainak emlékműve——日本語に直訳すると「ドイツ占領犠牲者の記念碑」)が2014年に設置された。この記念碑は、ギリシア風の神殿を模したかのように並ぶ柱の前でナチ・ドイツを象徴する鷲がハンガリーを象徴する大天使ガブリエルを空から襲う意匠で、大きさは高さ7メートルにも達する巨大なものである。道路の南側(写真1では手前側)には、この記念碑を批判する人々が設置した写真や椅子などが様々に並んでいる。これらは、記念碑を訪れる者に対して、そのコンセプトを批判的に考え直すことを促す目的で置かれている。

コシュート・ラヨシュ広場の改修工事も、このドイツ占領による犠牲者の記念碑も、ともに2010年代に計画が立てられ、1944年を一つの基準にしている点で共通する。二つに共通する背景は何だろうか。そして、なぜドイツ占領による犠牲者の記念碑の前には、そのコンセプトを批判した写真や椅子などが置かれているのだろうか。この章では、こうした問いについて考えつつ、ドイツ占領による犠牲者の記念碑に表れる歴史への理解や解釈(歴史認識)を分析することを通じて、多様性を考える手がかりを探してみたい²。

2. 記念碑への批判

2013年12月末、ハンガリーのオルバーン・ヴィクトル(Orbán Viktor)³政権は、ドイツ占

¹ 本章の3枚の写真は、いずれも2017年8月27日に筆者が撮影したものである。

² 本章では近年のハンガリーの第二次世界大戦期をめぐる歴史認識に注目する。2000年代以降のハンガリーの政治状況を踏まえた歴史認識をめぐる諸問題全般については、韓国の歴史家イム・ジヒョンが提唱する「犠牲者性ナショナリズム」を用いて論じた姉川 2018を参照されたい。

³ ハンガリー人の名前は姓・名の順で表記する。

領による犠牲者の記念碑をブダペシュト5区に建設する政府決定を発表した。竣工日はドイツ軍のハンガリー占領から70周年を迎える2014年3月19日を予定していた(2056/2013. (XII.31.) Korm. határozata)。約3週間後に建設計画の詳細が明らかになると、国内のユダヤ人コミュニティの指導者たちが反対を表明し、その反対を支持した歴史研究者や芸術家、政治家なども相次いで記念碑を批判した。大規模な反対運動が続く中で記念碑は7月に完成するが、落成を記念する公式な式典が開かれることはなかった(Eróss 2016, p.242)。

この記念碑に対する様々な批判の中で最も重要なのが、記念碑が示す歴史認識への批判である⁴。先に述べたように、この記念碑はナチ・ドイツがハンガリーを蹂躪する意匠である。すなわち、ナチ・ドイツおよびドイツ人を「加害者」、ハンガリーおよびハンガリー国民を「被害者」ないし「犠牲者」として描き出している。この構図に従うと、ホロコースト(第二次世界大戦期のユダヤ人迫害)を含めて、1919年以降の第一次世界大戦後のハンガリーで行われてきたユダヤ人をはじめとする住民への様々な加害の側面が見えなくなってしまう。このため、当時のハンガリー政府や国民による加害を免責することにつながると批判されたのである。

この批判を理解するためには、第一次世界大戦末期から第二次世界大戦期のハンガリーの歴史とユダヤ人との関わりをpushしておく必要があるだろう。

第一次世界大戦後の中央・東ヨーロッパでは、ハプスブルク帝国やオスマン帝国などの諸帝国が解体し、文化的に均質で一つに統合された国民から成り立っていることを建前とした国民国家が新たに並び立つこととなった。二重制をとるハプスブルク帝国の東半分を構成する多民族的な王国であったハンガリーでは、1918年秋から、領内の民族的マイノリティ⁵の自立と隣接する新興国民国家への合流、戦勝国の承認を受けた新興国民国家からの軍事介入により、歴史的な領土の大幅な解体が進んだ。1920年6月、トリアノン講和条約が調印され、それまでの領土の約三分の二を周辺国に割譲することと、国境外に約300万人のハンガリー語話者が居住することが国際的に確定した。このため、両大戦間期のハンガリーでは領土回復を目指した講和条約の修正が最重要な外交課題となった。この第一次世界大戦の戦後処理への不満が、1933年以降にハンガリーをナチ・ドイツへ接近させる原因ともなった。この領土解体とトリアノン講和条約は、現在でもナショナリストを中心に

⁴ この他、記念碑の設置場所やデザインの面でも批判がみられる(Eróss 2016, pp.242-246)。

⁵ マジョリティ/マイノリティは日本語で多数派/少数派と訳されるのが一般的だが、その基準は人数ではなく、政治や社会の主導権の握りやすさである。

「民族的悲劇」として位置づけられている。

第一次世界大戦末期から直後のハンガリーでは、1918年10月の共和主義革命と、1919年3月の共産主義革命という二つの革命が起きた。領土解体が進んだ時期は、これらの革命で成立した政権下での混乱期と重なっていた。このため、1919年8月に共産主義政権が倒れた後には、一連の革命に関わった社会主義者や共産主義者などの政治家だけでなく、彼らと結びつけられたユダヤ人まで、保守派や急進右翼からは領土解体のスケープゴートとされ、急進右翼による暴力的な報復の標的ともなった。

一方、1919年秋から1920年代半ばにかけてのハンガリーでは、国民の政治的自由が一部制限された体制が確立した。この体制は旧海軍提督ホルティ・ミクローシュ(Horthy Miklós)を事実上の最高権力者としていたため、「ホルティ体制」と通称される。ホルティは1920年3月からハンガリーがナチ・ドイツの占領下にあった1944年10月16日にナチスに同調した矢十字党(サーラシ・フェレンツ(Szálasi Ferenc)が率いたハンガリーのファシスト政党)のクーデタで失脚して亡命するまで、摂政の座にあった。このホルティ体制下では「キリスト教国民」の理念が掲げられ、1920年9月にはユダヤ人の高等教育進学を実質的に制限する法律が国会で成立している。

ハンガリーがナチ・ドイツへの接近を強めた1930年代後半からは、更に人種主義的な色を強めた反ユダヤ法が相次いで成立した。人種主義とは、非常に簡単にまとめると、人間を「人種」という区分を用いて分類し、それぞれの「人種」の間には性質や能力において優劣があるとして、「優れている人種」が「劣っている人種」を差別することを正当化する考え方である。1938年には出版や専門職などに従事するユダヤ人の比率が制限された。1939年には「人種」として位置づけられたユダヤ人の公職追放や就業者比率の制限強化が定められたほか、多くのユダヤ人が選挙権を喪失した。1941年には、ユダヤ人と非ユダヤ人との通婚が禁止され、1942年にはユダヤ人の農地・森林の不動産などの取得が禁じられた。

ハンガリーは、ナチ・ドイツの影響の下で、トリアノン講和条約後の最重要外交課題であった領土回復を図った。ドイツの仲介による二度のウィーン裁定(1938年11月と1940年8月)により、チェコスロヴァキアとルーマニアから旧領土の一部を獲得した。1941年4月にはドイツのユーゴスラヴィア攻撃に協力して旧領土の一部を占領し、この年の6月の独ソ戦開戦後はソ連にも宣戦布告した。

ナチ・ドイツに協力したハンガリーはホロコーストにも加担した。独ソ戦開始後、1941年8

月末にはドイツ軍占領下のカメニェツ＝ポドルスキ(現ウクライナ領)でユダヤ人の大量虐殺が行われた。ドイツ軍によって殺害されたユダヤ人の中には、1939年3月にハンガリーが軍事占領した旧領である北東部のカルパチア山麓地域からドイツ軍占領地域へと追放されたユダヤ人も多数含まれていた。1941年4月からのユーゴスラヴィア攻撃によりハンガリー軍が占領していた旧領では、1942年1月に、抵抗運動に対する掃討作戦が行われた。その過程でウイヴィデーク(セルビア語ではノヴィ・サド、現セルビア領)ではハンガリー軍による虐殺が行われ、ユダヤ人も多数犠牲となった。1944年3月にドイツ軍に占領された後、ハンガリーからのユダヤ人の強制移送が決定された。国際的な非難を受けてホルティは6月に中止命令を出す。7月までに、約44万人のユダヤ人が移送され、その多くはアウシュヴィッツで殺害されたとされる。この年の10月には、戦線離脱を模索したホルティに対して、ドイツの意向を受けた矢十字党がクーデタを起こし、政権を掌握した。矢十字党政権の下でユダヤ人への迫害は苛烈さを増した⁶。1945年4月、ソ連軍によってハンガリーは「解放」、すなわちハンガリーでの戦争は終結した。ハンガリーがナチ・ドイツの影響下で獲得した旧領土の支配は、1947年2月のパリ講和条約で全て無効となった。

一方、1944年12月に東部のデブレツェンで設立された臨時政府は、翌年4月の「解放」後にブダペシュトに移転した。1945年11月の国会議員選挙では小農業者党が勝利する。同党を中心とする連立政権は、1946年2月に王制廃止と共和国宣言を行った。冷戦体制が確立する中、1947年夏から翌年にかけてラーコシ・マーチャーシュ(Rákosi Mátyás)率いる共産党が一党独裁体制化を進めた。ラーコシは1949年5月以降に国内政治の粛清を行

⁶ 例えば、首都ブダペシュトではゲットーを形成してユダヤ人を隔離しただけでなく、矢十字党員によるゲットー襲撃やユダヤ人の殺害が行われた。国会議事堂そばのドナウ川岸には、この時期に矢十字党によって殺害されてドナウ川に突き落とされたユダヤ人たちを追悼する靴のモニュメント(写真2)が60周年に当たる2005年に設けられた。



写真2

い、8月にはソ連のスターリン憲法にならった憲法を制定して「人民共和国」を宣言した。こうしてハンガリーは、1989年まで冷戦の東側(社会主義陣営)に属することとなった。

話をドイツの占領による犠牲者の記念碑に戻そう。先にも述べたように、この記念碑はナチ・ドイツを「加害者」、ハンガリーを「被害者」・「犠牲者」として二項対立的に示す。しかし、これまで紹介したことからも明らかなように、ファシスト政党であった矢十字党の政権だけでなく、それ以前のホルティ体制下のハンガリーもユダヤ人に対する人種主義的な政策を行い、ナチ・ドイツに協力してユダヤ人の迫害に加担した。ハンガリーをナチ・ドイツの「被害者」・「犠牲者」として描き出すことは、1919年以降のハンガリーで行われてきたユダヤ人への数々の抑圧・暴力を免責することにつながってしまう(姉川 2018、p.203)。このため、記念碑の建設計画が明らかになった時に、ユダヤ人コミュニティから真っ先に反対の声が上がったのである⁷。

3. ヨーロッパ現代史をめぐるEU加盟国間での歴史認識の相違

このように第二次世界大戦期のハンガリーを「被害者」・「犠牲者」として描き出す姿勢は、もう少し広い文脈、1990年代以降のヨーロッパでの歴史認識をめぐる課題という観点から考察することができる。

ヨーロッパで現代史をめぐる歴史認識への取り組みといえば、第二次世界大戦後のドイツ(1990年の東西ドイツ統一までは西ドイツ)における「過去の克服」(ナチ政権とその諸政策が生んだ暴力が各地でもたらした凄惨な結末という「負の記憶」)に向き合い続ける取り

⁷ 2017年8月に筆者がこの記念碑を訪れた際には、当時のハンガリーの加害の側面を指摘する「ハンガリー人とドイツ人によって殺されたハンガリー人たち」というキャプションが添えられたホロコースト犠牲者たちの写真(写真3)が見られた。



写真3

組み)が日本では有名である。ナチ・ドイツと戦った旧連合国のうち、イギリスやフランスのような冷戦期に西側(資本主義陣営)に属した国々は、第二次世界大戦の終結をファシズムに対する自由民主主義の勝利と位置づけてきた。

一方で、ポーランドやハンガリーのように冷戦期に東側に属した国々、いわゆる旧社会主義東欧圏では、ナチズムとそれにまつわる第二次世界大戦期の「負の記憶」について、1989年以降の体制転換の中でドイツとは異なる課題を抱えるようになった。冷戦期のこれらの国々では、共産主義的なイデオロギーにもとづいて国家や国民の歴史が書かれてきた。テイトー率いるパルチザンがナチ・ドイツ軍を撃退したユーゴスラヴィアを除けば、旧社会主義東欧圏の国々ではいずれも、ファシズムに対して共産主義が勝利した、すなわちソ連によってナチ・ドイツの支配から「解放」されたという歴史認識が公式のものとしてされてきた。

しかし、体制転換後に旧社会主義東欧圏の各国で資本主義や自由主義、複数政党制による議会制民主主義が採用され、西欧を起源とした欧州連合(EU)が主導する欧州統合への枠組みに加わるようになると、これらの国々では政治体制への移行を正当化する形で国家や国民の歴史を再定義する必要が生じた。そこでは、第二次世界大戦後の社会主義体制下での経験や記憶の位置づけが大きな課題となった。

その過程で、ナチズムと共産主義を「二つの全体主義」として捉える歴史認識が浮上した。冷戦初期の西側諸国では反共産主義イデオロギーも相まって、ナチズムと共産主義を本質的に同一の「全体主義」とみなす議論が見られた。しかし、その後の実証的な研究の進展でナチ体制が複数の権力集団から成っていたことなどが明らかにされ、その論の不十分さが指摘されるようになっていた。この「全体主義」論が、1990年代以降の旧社会主義東欧諸国が体制転換とその後の政治体制の正当化を目指す過程で再登場したのである。その結果、これらの国々では歴史認識の枠組みが大きく変容し、第二次世界大戦と大戦下での軍事占領、その後の社会主義体制が自国の外部から強制されたものとして描かれるようになった(橋本 2018、pp.7-10)⁸。すなわち、これらの国々では自国を「二つの全体主義」の「被害者」・「犠牲者」として位置づけるようになったのである。

⁸ 橋本はこの傾向を、先述した「犠牲者性ナショナリズム」を用いて分析するとともに、1970年代から1980年代にかけての南欧や中南米などで軍事独裁や権威主義体制から民主主義へと体制が転換した過程で進められた「移行期正義」(旧体制による犯罪の真相究明と犠牲者の人権や名誉の回復と補償、旧体制による犯罪に関与した者への処罰などを通じて国民的和解と正統性の調達を図ろうとする政治的・司法的過程)の延長線上に位置づける。(橋本 2016、pp.117-122;同 2018、pp.8-9参照)

EUもこの動きに呼応した。1996年6月には欧州評議会の議員会議（EU加盟各国の国会議員で構成される諮問機関）が「旧共産主義的全体主義体制の遺産の廃止のための措置」を決議している。2004年5月、ポーランドやハンガリーなど旧社会主義8カ国がEUに加盟した。冷戦期の西欧諸国に起源を持つEUは、第二次世界大戦終結を自由民主主義のファシズムに対する勝利だとみなしてきた。しかし、「二つの全体主義」の立場を取るこれらの新規EU加盟国にとって、第二次世界大戦終結はソ連による「占領」の始まりを意味した（ただしバルト諸国では、1940年にソ連に「占領」され、1941年から44年までのナチ・ドイツ占領期を経て、1944年に「再占領」されたという歴史認識が公式の立場とされている）。このため、翌年の第二次世界大戦終結60周年には、バルト諸国を中心とした新規加盟国が既存のEUの歴史認識を批判し、欧州議会では激しい論争となった。欧州議会は2008年9月に独ソ不可侵条約とそれに付帯する秘密議定書が締結された8月23日を「スターリニズムとナチズムの犠牲者を想起するヨーロッパの日」と宣言しており、「二つの全体主義」論はEUで定式化されているようにも映る。しかし、この日の位置づけは各国によって異なる。その態度の違いからは、EU加盟国間での歴史認識の差異や対立が読み取れる（橋本 2016, pp.110-113; 同 2018, p.10）。

この「二つの全体主義」論にもとづいてハンガリーで建設されたのが、第一次オルバーン政権末期の2002年春にブダペシュトに開館した「テロルの館」と呼ばれる博物館であった。この直後の国会議員選挙で社会党（社会主義体制下での政権与党の後継政党）に敗北して下野したオルバーンは、大衆を動員した右派ポピュリズム路線の政治活動を進めるようになった。2006年秋のハンガリーでは、当時の社会党政権の首相が同年に行われた総選挙に際して経済状況について虚偽の発言をしていた旨の録音が漏洩したことで、大衆の抗議活動が高まった。奇しくもこの年は、社会主義体制下のハンガリーでソ連に対する抵抗運動が展開された1956年から50周年であった。オルバーンや彼が率いる右派政党フィデス＝ハンガリー市民同盟（通称フィデス）、さらには極右勢力も、ハンガリー国民が再び共産主義者によって騙されていると主張し、当時の社会党政権を非難した。こうした政治状況を背景に、フィデスは2010年春の総選挙で圧勝し、政権を奪還した。

オルバーンは、この2010年の総選挙を「投票所の革命」と呼び、政府は体制転換の総仕上げと位置づける諸政策を実施した。その政策は公共の場にも及んだ。2011年には同じくフィデスが多数派を占める首都ブダペシュトの市議会が、社会主義体制期から使われてきた共産主義の理念を反映したような通りや広場などの名称を変更することを決定した。冒

頭で述べた2012年に始まるコシュート・ラヨシュ広場の改修工事も、この諸政策の延長線上に位置づけられるものであった。

4. おわりに：記念碑に表れる歴史認識——多様性への展望

「はじめに」で、コシュート・ラヨシュ広場の改修工事とドイツ占領による犠牲者の記念碑には共通する背景があると述べた。二つに共通する背景とは、1944年のドイツ軍によるハンガリー占領を「二つの全体主義」によるハンガリーおよびハンガリー国民の犠牲の始まりだと解釈する歴史認識である。

しかし、1.でも述べたように、「被害者」・「犠牲者」としてのみハンガリーとハンガリー国民を描き出すことは、1919年以降のハンガリーにおいて、ユダヤ人に対する人種主義的な抑圧策が採られ、最終的にはホロコーストに至ったという加害者としての側面に向き合っていないことを意味する。このため、ドイツの占領による犠牲者の記念碑の建設に際して、ユダヤ人コミュニティは真っ先にこの点を批判し、歴史研究者や芸術家、政治家たちからもその批判を支持する者たちが現れた。こうした人々が、記念碑の前にこれを批判する写真や椅子などを設置したのである。ドイツの占領による犠牲者の記念碑に表れる歴史認識は、ハンガリー国内における歴史認識の相違だけでなく、その背景にある1990年代以降の旧社会主義東欧圏の各国が抱えた歴史認識の特徴を明らかにしている。

歴史認識とは、時代(特に政治状況)に応じて、時には論争や対立も伴いながら作られていくものである。何らかの歴史認識が表明される時、その歴史認識はどのような集団がどのように関わり合いながら生まれたものであろうかと一旦立ち止まって考えてみると、様々な立場の人々の姿が浮かび上がってくるはずである。その表明は言葉を通じてではなく、記念碑などを通じて日常の空間に表れるものかもしれない。

参考文献

- 姉川雄大(2018).「ハンガリーの歴史認識と現代政治——「ヨーロッパ」性と新自由主義・人種主義政治——」、橋本伸也編著、『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題——ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤——』、ミネルヴァ書房、195-216.
- 橋本伸也(2016).『記憶の政治：ヨーロッパの歴史認識紛争』、岩波書店.
- 橋本伸也(2018).「序章 中東欧・ロシアにおける歴史と記憶の政治化と紛争化」、同前掲

編著, 1-15.

Eröss, Ágnes(2016). “In memory of victims”: Monument and counter-monument in Liberty Square, Budapest. *Hungarian Geographical Bulletin*, 65(3), 237-254.

2056/2013. (XII.31.) Korm. határozata. *Magyar Közlöny*. 2013.évi 225.szám, p.90300.

<http://www.kozlonyok.hu/nkonline/MKPDF/hiteles/MK13225.pdf> (2020年3月1日確認)

もっと知りたい人のためのブックリスト

ハンガリーを含む中央ヨーロッパの歴史を知りたい人には……

- ・南塚信吾編(1999).『ドナウ・ヨーロッパ史』、山川出版社.
- ・南塚信吾(2012).『図説ハンガリーの歴史』、河出書房新社.

旧ソ連・社会主義東欧各国の現代史をめぐる歴史認識の問題を知りたい人には……

- ・橋本伸也(2016).『記憶の政治——ヨーロッパの歴史認識紛争』、岩波書店 .
- ・橋本伸也編著(2018).『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題——ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤——』、ミネルヴァ書房.

記念碑などに表れる歴史認識の読み解き方を知りたい人には……

- ・ピエール・ノラ編、谷川稔監訳(2002).『記憶の場——フランス国民意識の文化＝社会史』全3巻、岩波書店.